

< 2017年 7月 >

古賀 順子

「サクレ・クール寺院」

今年も7月14日「パリ祭」を迎えました。

丁度1年前、ニースのプロムナード・デ・ザングレ海岸通りで、86名の死者が出たトラック突入テロ事件の生々しい記憶が消えない祝日です。5月に就任したマクロン新大統領の招待に応じて、トランプ米大統領が参列する「軍事パレード」は、厳しい警戒体制の下に行われました。

テロの脅威は常にありますが、パリにも少しずつ観光客が戻っています。7月上旬から、東京の日本外国語専門学校アジア・ヨーロッパ言語科の学生さん7名が、2週間のフランス語短期集中授業を受けるために、パリでホームステイをしています。「パリ祭」は授業がないので、皆でモンマルトルの丘にある「サクレ・クール寺院」を見学しました。

モンマルトルの丘は昔からの聖地で、5世紀にはパリ初代大司教聖ドニが祀られ、寺院の隣には、パリで最も古い聖ペテロ教会があります。現在のローマ・ビザンチン様式のサクレ・クール寺院の歴史は、1870年に遡ります。1870年、フランスとプロセイン王国間で普仏戦争が勃発。ドイツ連邦軍の軍事力に圧倒的な大敗を喫したフランスで、フランスが戦争に負けたのは、信心が足りなかったからだという一部の声が上がリ、「キリストのご聖体」を祀る教会を建立する運動が起こります。議会の承認を得て、モンマルトルの丘が選ばれ、1875年、深さ33mの支柱の上に、現在のサクレ・クール寺院の建立が始まりました。建築家ポール・アバディー (Paul Abadie, 1812-1884) の設計ですが、完成に至る1914年まで、6人の建築家が交代し、1914年第一次世界大戦が始まり、落成は1919年に伸びます。ドームの高さ83m、幅35m、クーポールの高さ55m。外壁は、パリから南に100km弱のシャトー・ランドン近郊スプ・シュル・ロワンの石切り場から運ばれ、硬くて、雨に濡れると綺麗な白にな

るのが特徴で、パリを見下ろしています。

寺院は、「サクレ・クール」の名前の通り、キリストの心臓が「ご聖体」です。サクレ(Sacré)は「聖なる」の意、クール(Coeur)は「心臓」。つまり、サクレ・クール寺院は、キリストの「聖なる心臓」を拝領する場所です。聖堂内に入ると、祭壇の上を飾る475m²の大きなモザイク画が輝いています。白い衣に身を包んだ「復活したキリスト」が、胸には「黄金の心臓」が表れ、両手を広げています。キリストの両脇には、同じく「黄金の心臓」が描かれる聖母マリア、大天使聖ミカエル、ジャンヌ・ダルクがパリの護り神として控えています。1900年から1922年で制作されたモザイクで、1923年から訪れる人々を迎えています。

大きさを誇るのはモザイクだけではありません。サクレ・クール寺院には、1891年に鑄造されたフランスで一番大きな鐘「サヴォワイヤルド (サヴォワの鐘)」(19トン)があります。サヴォワ地方の4教区から贈られたもので、1894年、28頭の馬に引かれてパリに到着します。復活祭、クリスマスなど、限られた重要なお勤めだけに鳴らされます。

「パリ祭」の今日、多くの観光客は、午前中の軍事パレード(凱旋門からコンコルド広場までのシャンゼリゼ通り)を見に行くので、サクレ・クール寺院を訪れる人は少なく、寺院を出て、似顔絵を描く画家が集まるテルトル広場を一回り、モンマルトルの丘に残る小さなぶどう畑、シャンソン居酒屋「ラパン・アジル」などを見ながら、抜けるような青空に恵まれた散歩を楽しむことができました。

そのパリから930km離れたニースでは、昨年のテロ事件の犠牲者を悼む式典が行われました。夜の花火は中止し、遺族の会の希望で、追悼コンサートと天に向けて夜の照明が予定されています。

亡くなった方々のご冥府をお祈りすると同時に、文化や宗教が異なる人々が共存するフランスが平和であることを願いたいと思います。